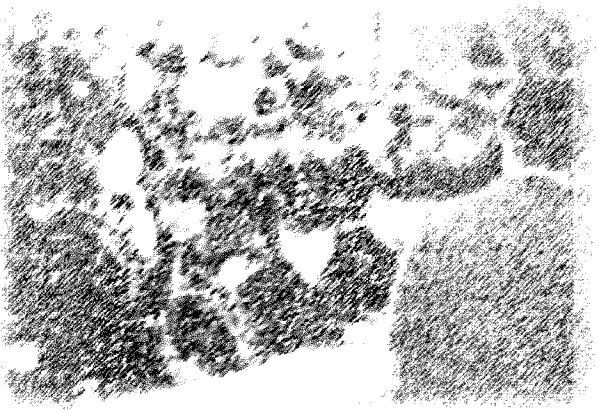
国連NGO横浜国際人権センター・うずしおブランチ
T-over人権教育研究所・人権こども塾　ニュース

学年全体で語り合う部落問題学習（全体学習）がスタートするまで

私は、1990年4月、板野中学校に赴任しました。初めての人権学習において、「私の中学時代の友人が、高校で出会った友人に、自分は部落でないと示すために、誰と誰が部落であると友人に告げた高校時代の体験を語り、仲間を裏切る人間にはなるな」と訴えました。その私の訴えに対して、一人の生徒が、生活ノートに次のような思いを綴ってくれました。



私は先生が言うように、実は友達を裏切りました。板野中学に入学してきたとき、N小学校から来た友達は、N小学校には部落がなかったので、M小学校からきた私たちに何か特別な感情を持っていたと思います。

私はN小学校から来た友達と仲よくなった。その時にその子に言われた。

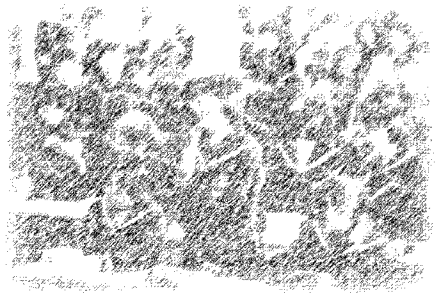
「Y子ちゃんは部落?」って……。私はその時に部落と思われるの嫌だから、一生懸命違うと言った。それだけじゃなくて、そのことをきちっと示すために、同じM小学校からきた友達を私は裏切りました。

「○○ちゃんがそうよ。○○ちゃんもそうよ。」と言った。

その子は「えっ!あの子がそう。そういうふうに見えんなあ。」と言いました。

当時、生徒たちは空気を吸うがごとく差別を吸収し、その中で苦しみ揺れていました。しかし、同和教育の中身は、そんな現実を乗り越えていくものには、なっていませんでした。

それは、自らの差別意識をそのままに「差別はいけません」という表面的な価値観を押し付け、お説教を繰り返してきた授業でした。



その授業の大半は、部落差別の現実が示された資料を読んで、感想を言わせるだけの授業であり、決まり切ったことしか語れない状況の中で、しらけきった生徒たちに、表面的な感想を書かせて終わっていました。

そこには自らの内面にある差別意識に気づかず、あるいは直視せず、そしてないがしろにしたまま、教師が期待しているであろう内容を書く生徒の姿。そして何よりも、決して自己と向き合うことのない授業を繰り返す教師がいました。

それは、部落に生まれたことを、悲しくつらいこととしかとらえられず、部落の人たちに対する同情心のみをかりたてる取り組みでした。そして、部落の生徒たちは、その中で息をひそめ、顔さえあげることができず、無気力にさせられていきました。

板野中学校では、そんな「ホンネ」と「タテマエ」をうまく使い分け、「タテマエ」に終始する人権学習を「密室の同和教育」と分析しました。そこから、「ひとごと」を「わがこと」にする語り合いをめざした人権学習の実践、「学年（学校）全体で語り合う部落問題学習（全体学習）」が始まりました。

本気の人権学習は、――「すべてを変える」　うずしおブランチ共同代表　森口　健司